

“未発の状態”のエピステモロジー

『惑星社会のフィールドワーク』に向けて

阪 口 毅

“Stato Nascente” as Epistemology: Toward “Fieldwork on the Planetary Society”

Takeshi SAKAGUCHI

This article is based on a research project called “The Planetary Society after 3.11” at the Institute of Social Science, Chuo University, since 2014. The concept of “After 3.11” means that “the multiple problems” have subsisted before 3.11, so we are required to change our own epistemology. With this awareness of the problems, the research project has tried to develop epistemology, methodology and methods for comprehending minute movements in regions and communities. In particular, we have discussed the epistemology build on a key concept of “stato nascente.”

In this paper, I consider the characteristic features of the epistemology. The concept of “stato nascente” as epistemology relativizes “linear thinking” and “substantialism,” seeing agents as “veins,” routes of dynamic relationships.

1. はじめに “動き” そのものへ

本稿は、社会科学研究所の研究チーム「3.11以降の『惑星社会』」の共同研究の知見をふりかえり、2016年度刊行予定の『惑星社会のフィールドワーク』に向けた課題を析出することを目的としている。同書は、研究チーム「ヨーロッパ研究ネットワーク」が2014年3月に刊行した『“境界領域”のフィールドワーク』¹⁾の続編として、その課題を引き継ぐものである。そこでは、およそ以下のような問題意識が共有されてきた。

新たな研究チームの名称である「3.11以降」という言葉が意味しているのは、現実がある時点を分水嶺として新しくなったということではなく、私たちの認識が変化を求められているということである²⁾。ずっとあり続けてきたはずの“惑星社会の諸問題”に、「3.11」を契機として遅ればせながら気づいた。その地点から、これまで築いてきた理論や方法を組み替えていかなければならない。これまで何を見過ごしてきたのか、フィールドワークを通じて捉えていた

はずの「小さな事実」の意味をふりかえる。しかし同時に、ふりかえるための枠組みそのものをつくっていかねばならない。

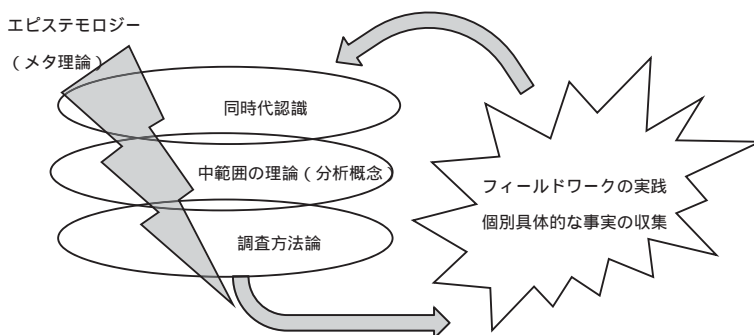
こうした問題意識のもと編まれた『“境界領域”のフィールドワーク』から見てきたのは、研究代表者である新原道信が錬磨した概念である“境界領域 (cumfinis)”のうち、「地理的・物理的・生態学的・地政学的・文化的な成層」³⁾を表わす“テリトリーの境界領域”と、それらの客体的な成層が「個々人の身体に埋めこまれ/植えこまれ/刻みこまれ/深く根をおろした成層」⁴⁾としての“心身/身心現象の境界領域”という二つの位相は、空間的(構造的・静態的)な把握に強みが発揮されるということであった。すなわち、時間を限定した上で、ある一時点における諸要素の配置図を描き出すということである。それぞれの執筆者達は、自らのフィールドワークの知見をふりかえり、個別具体的な地域現場において生起する、これらの「境界領域」現象を捉えなおした。しかし共通する課題として残されたのは、“惑星社会の諸問題”の構造的な把握の先、“メタモルフォーゼの境界領域”の位相を捉えることであった。前述の二つの位相が空間軸において把握されやすいのに対し、この“メタモルフォーゼの境界領域”すなわち「多方面へと拡散・流動する潜在力の顕在化を常態とする成層」⁵⁾は、時間軸に焦点をおく、いわば主体の“動き”そのものである。

2014年度の研究チームの中心的課題は、この主体の“動き”そのものを捉えるためのエピステモロジー/メソドロロジー/メソツズの錬成にあった。とりわけエピステモロジーの翠点となる“未発の状態 (stato nascente)”概念の設定する主体像に関しては、すでに新原がA・メルツチの社会運動論との対話から“未発の社会運動 (movimenti nascenti)”概念を錬成するに至っている⁶⁾。また2014年度においては、地域社会学会を中心として、新原道信、古城利明、鈴木鉄忠、阪口毅らが、その知見を交換・報告・発表してきた⁷⁾。その過程で問われたのは、メルツチ 新原が錬成した概念によって各々のフィールドワークの知見を分析することではなく、それと対話可能な「自前の理論」をフィールドワークの知見から叩き上げようとするのであった。

ここで言う「自前の理論」とは何か。少なくとも、問題設定を支える同時代認識、中範囲の理論としての分析概念、実証研究を可能とするための調査方法論の三つの要素からなり、これらの要素はフィールドワークの実践による個別具体的な事実の収集によって、絶えず検証され組み替えられる(図-1)⁸⁾。「自前の理論」とは、広義にはこれらの全過程の総体であり、狭義にはこれらの全過程を貫くエピステモロジー(同時代認識と結びついた根本的な問題意識)であり、最狭義にはエピステモロジーの翠点となる一つの(あるいは複数の)概念「自分のモチーフ」⁹⁾である。これらの諸要素は、分節化し自ら掴み直す必要がある。

本稿は、2014年度の研究チームにおける「集合的な試み」の一環として、“メタモルフォーゼの境界領域”を捉えるためのエピステモロジーの翠点である“未発の状態”概念について検討

図 1 「自前の理論」とは何か



出所：筆者作成。

するものである。それは同時に、これから筆者自身が「自前の理論」を練り上げていくために、これまで誰の影響を受けてきたのか、誰の影響下で考え書いているのかを、つまびらかにして進むということである。本稿の議論は、こうした偏りと限界を持つ。以下、第2節では、「未発の状態」をキーコンセプトとするエピステモロジーの特徴について検討する。第3節では、エピステモロジーとしての“未発の状態”が想定する主体像について検討し、それが「確固たる自己」を持つ近代的主体ではなく、揺れ動く（playing）自己を持つ複数の「弱い主体」の間で結ばれる社会関係であることを明らかにする。第4節では、本稿の結びとして『惑星社会のフィールドワーク』刊行へ向けた今後の課題をまとめる。

2. エピステモロジーとしての“未発の状態”

2014年11月に行われた、地域社会学会第3回研究例会における議論のエピソードから始めたい。この議論のなかで浮かび上がってきた主要な論点が、エピステモロジーとしての“未発の状態”の諸特徴を表していると考えられるからである。この日行われた、新原道信の報告「生存の場としての地域社会の探究／探求（Exploring Communities for Sustainable Ways of Being）」は、10月に行われた第2回研究例会における、浅野慎一と古城利明の二報告への応答として用意されたものであった。新原は研究の「復路」に差し掛かった者として、その「往路」をふりかえるという設定で、次のように語った。

「3.11」を受けて、これまでの自身の研究の不十分さを感じた（……）。地域研究者としてはじめに行ったのは、沖縄調査であった。父親が植民地時代の朝鮮半島に生まれ、時代に翻弄されてきたことが私の原問題であり、「国家に抗する地域」を考えたいという問題意識を持ち続けてきた。サルデーニャ調査では、1986年にラ・マッダレーナで行われた

NATO原子力潜水艦基地反対の住民投票に「居合わせた」が、地元の知識人たちからは「人口160万人の島にとっては『些細な問題』である」と言われた。1987年の国民投票によって全原発が停止し、その後、運動は沈降したように見えた。だから「3.11」の後、2011年の国民投票によって原発停止の継続が決定したのは、地元の知識人たちにとっても驚きであった。しかし今ふりかえれば、その「徴候」を目にしてきたのではないか。隣人のポーランド女性は、子どもを授かり、喜びと不安の入り混じった様子で「親族で子どもを授かったのは初めて」だと話していた。青舌病で羊を失い、コルシカに移民した羊飼いの男性は、生活再建の目処が立った矢先に脳腫瘍で亡くなった。チェルノブイリ以降、「因果関係は証明できない」が、日常の生活世界のなかで「うっすらと感じてきたこと」が、水脈のように流れ続けてきた。自分はなぜ、出会ったものを手放してしまったのか。「未発の社会運動」は、マグマのように伏し続けている。これから研究の「復路」として、すでに「居合わせていた」はずの「未発の状態」を捉えなおしていきたい¹⁰⁾。

これに対し、「誰がどのように『未発の状態』を定義するのか。社会運動が社会を変えると、いう想定があるのではないか」、「『未発』は『発生』と対になっており、何かが起こった後に意味づけがなされるのではないか。しかし何も無いときに観察できるのは、一定の問題設定ないし予見があるからではないか」との問いかけがなされた¹¹⁾。両者に共通していたのは、「未発」と「運動」ないし「発生」を対概念として、後者の地点から前者の意味を後づけるというエピステモロジーであった。ここから二つの論点を引き出したい。第一に、「未発の状態」とは「運動」や「発生」から後づけられるものなのか、ということである。これは、いつ、誰が「未発の状態」を「発見」するのかという認識の方法をめぐる議論と関連する。第二に、「未発の状態」とは「何も無い」状態といえるのか、ということである。これはそもそも「運動」や「発生」とはいかなる社会過程であるのかという、認識の内容をめぐる議論と関連する。

しかし、これらの論点について検討する前に、まずは新原がメルッチの議論を踏まえて訳出した「未発の状態(stato nascente)」の概念内容について確認しておきたい。「stato nascente」は、化学の用語で「発生期状態」を意味し、元素が化合物より遊離した非常に反応性の高い状態のことを指す。すなわち「いつ」「どの」元素が反応するか予測できないが、いつどこで反応が起こってもおかしくない、蓋然性が極めて高い状態である。新原が、イタリアの社会学者F.アルペローニの用いたこの概念を「未発の状態」と訳出したのは、メルッチの社会運動論と、鹿野政直の「未発の一揆」概念とを結びつけ、社会運動の潜在性のメタファーを表すためである。鹿野は「社会史」と「政治史」との断絶に対して、以下のように注意を促している。

実際には、一揆のときだけが異常事態で、その他のときはすべて静謐であったかのように

歴史を描くのは、当を得ていない。不平・不満・いらだち・愚痴・怒り・歎き・悲しみ・あきらめ・そねみ、その他もろもろのかたちをとる秩序への違和感は、人びとのうちに不断に醸しだされてきているのが、むしろ常態で、その意味では一件の一揆は、無数の未発の一揆の延長線上にある一つの波頭としての性格をもつ。“平時”においてもそのように未発の一揆が反芻されるからこそ、一揆の記憶は伝統として生きつづける。そのヴォルテージの高まりが、ある瞬間に一揆として飛翔する。両者を完全に切断し、べつべつの領域に閉じこめるのは、歴史の真相を衝いていない¹²⁾。

“未発の状態”概念は、時間軸上では（「発生」した）「一揆」という一つの個体にとっての「非常時」と、無数の「未発の一揆」が繰り返された「平時」との“間”を、空間軸上では政治空間と日常生活空間との“間”を表わしており、また同時に「秩序への違和感」の「ヴォルテージ」が極めて高まった主体の状態を指しているのである。

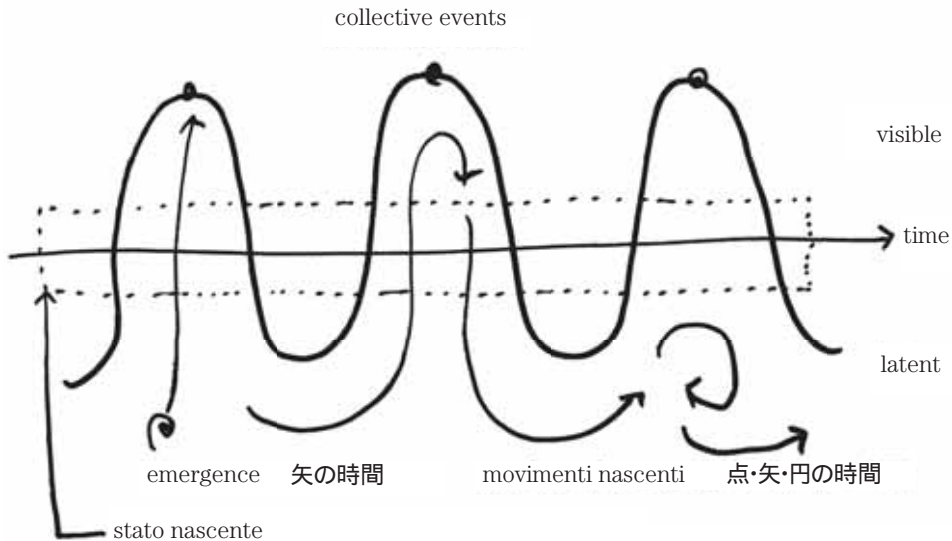
以上の議論を踏まえて、まずは第一の論点について検討する。“未発の状態”の認識方法に関しては、すでに第2回研究例会において議論がなされていた。古城利明の報告¹³⁾において「3.11以降の状況」を“未発の状態”の顕在化とする新原の議論と、「想定外」の「潜在的リスクの顕在化」とする田中重好の議論との異同が検討され、質疑応答を通じて以下の理解が共有された。すなわち、“未発の状態”概念が提起しているのは、何かが起こった後、遡及してその過程を後づけていくというエピステモロジーであり、「3.11」によって社会が変わったのではなく、認識が変わったということである。先行条件と「出来事」との単線的な因果連関は想定されず、未来への「予測」に対しては認識の限界（有限性）が立てられる。言語以前の心の揺らぎ、身体の反応、うっすらとした「予感」は、後になって、見過ごされた「徴候」として認識されなおす。これは本稿の冒頭で示した『“境界領域”のフィールドワーク』執筆の前提となったエピステモロジーでもあった。

確かに“未発の状態”は何らかの「集合的な出来事（collective events）」が生じた後、その時点からふりかえることで後づけるほかない。ただし「発生期状態」の含意を踏まえると、その認識の方向性については留意が必要である。ここから第二の論点が導かれる。すなわち、そもそも「発生」や「運動」をどのような社会過程であると見なしているのかという、認識内容をめぐる問題である。

ここで参照すべきはメルッチの社会運動論である。メルッチは、『現在に生きる遊牧民』において、集合行為を「整合的な実体」として捉え個々人の行動を「単一の性格（character）」と「形態（Gestalt）」からなるものとして把握する既存のアプローチを批判し¹⁴⁾、「集合行為が整合的な実体であるという前提を拒否¹⁵⁾する構成主義的アプローチを提唱した。この方法論的視座において、運動は政治的動員などの「可視性（visibility）」と日常生活における体験な

どの「潜在性 (latency)」との二つの位相に分節化される。潜在的状态は、「不活動性を意味するものではなく」、「抵抗や反対のポテンシャル」は「日常生活におけるオルタナティブな意味を实践する諸個人や集団の分子的経験 (molecular experience) の中に存在している」¹⁶⁾とされる。例えば女性運動の場合、「可視的な」政治的動員による制度的達成は運動の一側面ではあるが、運動の全てではない。「潜在的な」日常生活における生活様式や行為様式の変動、新たなアイデンティティや価値の獲得といった文化的変動もまた、運動の側面の一つであると見なされる。

図 2 “未発の状態”



出所：筆者作成。

“未発の状態”とは、社会過程の可視性 / 潜在性 (visibility/latency) の“境界領域”であり、「集合的な出来事」が生起する蓋然性が高いという意味で、多方向の可能態と収束した現実態という両義的な契機を併せ持っている (図-2)。潜在性の位相において社会過程は常に存在しており、蓋然性のなかで特定の時間と空間に「出来事」が生起する。「出来事」は一連の社会過程の終着点 (ないし「目的」としてではなく、社会過程の認識媒体 (media) として設定される。こうして“未発の状態”のエピステモロジーは、何らかの達成 (achievement) への単線的プロセスとしてのみ社会過程を位置づける認識論を回避する。

その一方で、時間と空間を限定して「集合的な出来事」の生起する過程に着目する問題設定もありえるだろう。この場合、観察対象としての「出来事」の主体は、所与の「整合的な実体」

としてではなく、潜在性の位相に存在する諸要素からの「創発（emergence）」過程の特異点として把握される。創発性は下位レベルの諸要素に還元不可能な実在の性質を表すため「実体主義」を呼び込むが、“未発の状態”という蓋然性の時空間のなかでは、主体は「非線形的で常に生成（becoming）途上にある」¹⁷⁾ものとして把握されなければならない。したがって、主体の創発性と潜在性は一連の社会過程の両側面である。それでは、このような特徴を持つ“未発の状態”のエピステモロジーは、いかなる主体像を想定しているのだろうか。

3. “未発の状態”の主体像 “水脈”としての主体

主体の“動き”を捉えるために、新原はすでに“毛細管現象/胎動/交感/個々人の内なる社会変動/未発の社会運動（movimenti nascenti）”という概念を錬成してきた。この“未発の社会運動”の主体の具体像として、地域社会学会第3回研究例会の新原報告のなかで語られたのは、「親族で子どもを授かったのは初めて」だと喜びと不安の入り交じった様子で語るポーランド女性であり、生活再建の望みをかけてコルシカに移民した矢先に脳腫瘍で亡くなった羊飼いの男性であった。チェルノブイリ以降、「因果関係は証明できない」が「うっすらと感じてきたこと」があり、その知覚の“交感”が連なって“個々人の内なる社会変動”が起こる蓋然性が高まる。2011年のイタリア国民投票で原発停止の継続が決定したのは、こうした潜在性の位相で社会運動が継続していたからだとして、新原は捉えている。こうした主体像は「可視的な」集合的動員としては捉えにくい。

第2回研究例会において次年度の学会テーマについて検討した、浅野慎一の報告で描かれた「国土のグランドデザイン」に対抗するオルタナティブとしての「生活圏としての地域社会」の主体像もまた、新原報告と共通する要素を持っていた。それは第一に「一国単位の公共性の回復・復活を求める批判的国民主義」¹⁸⁾であり、これは近代的主体の叩き直しとしても捉えられるだろう。しかし浅野が主流とする第二の主体性、「国家（公共性）に期待も依存もしない共同性、つまり脱国家的な共同主義に根ざす主体性」は、「脱領域的・越境的で自在に変化するもの」¹⁹⁾として設定され、「辺境・棄民による周辺の抵抗」と「市場に依拠した私的所有者による生活防衛のための選択的共同」の二階層が想定される。さらに第三の主体性として「地域社会に蔓延する『諦観』」²⁰⁾の動きにも目を向けている。これらの主体像は「国民」をモデルとする領域的（territorial）な近代的主体からはほど遠く、脱領域的・流動的・状況的な主体として捉えられる。

新たな主体像の模索は、地域社会学会においては「3.11以降」に始まったのではなく、1995年の阪神・淡路大震災以降の試みの延長線上にあるといつてよい。例えば似田貝香門らの研究グループは、1995年以降のボランティア活動調査から、被災者の「痛み」を受けとめ、責任を引き受けようとする過程で自己と活動のあり方を「そのつど」組み替えていくような支援者の

あり方を、「受動的主体」ないし「弱い主体」として捉えようとした²¹⁾。また中澤秀雄は、従来の「構造分析」の手法の限界と可能性について論じるなかで、「政策や生産関係、または集団・団体・階級によって構造化されない領域が地域にあらわれ、この『すき間』ないしは『裂け目』(cleavage) というべき部分がむしろ地域を支えたり変動させたりしているといつてよい状況」との認識を示している²²⁾。これもまた、安定的な「整合的な実体」としては捉えられない、新たな主体像の模索といえるだろう。

こうした主体像は、メルッチが主著『プレイング・セルフ』で提示した主体像とも重なる。先に述べたように、メルッチの運動論において「抵抗や反対のポテンシャル」は「諸個人や集団の分子的経験」のなかに蓄積されるとされるが、この場合の「諸個人」や「集団」とは「単一の性格」を持つ「整合的な実体」ではなく、「多重／多層／多面な自己 (the multiple self)」²³⁾を抱えながら絶えず自己を再定義し続ける (identization) ような主体である。これは時間軸上では「遊び／揺らぎをもった自己 (the playing self)」として捉えられる。このような主体の条件は、「自らの欠けたることを識る、自らの弱さを識る」²⁴⁾がゆえに特定の他者を必要とし、「個別の二者関係」をとり結ぶなかで絶えず自己を作りかえていく (change form) 力を持つことである。

新たな主体像として「多重／多層／多面性と遊び／揺らぎをもつ自己 (the multiple and playing self)」に焦点が置かれるのは、それが他者と出会い、関係性を結んでいくための条件となるからでもある。第3回研究例会の新原報告に対しては、次のような問いかけもなされていた。「マイノリティ同士が『居合わせる』ことで連帯をつくっていくのが大事だということは、この場にいる人たちは受け容れるだろう。しかし『3.11以降』の状況として『ヘイトスピーチ』に代表されるように、他者を『カテゴリー』で切る動きが出てきた。そういう人たちに対して言葉は届くのか。どんな戦略がありえるのか」²⁵⁾。これに対し、新原は次のように応えた。「たしかに『3.11以降』の状況は、他者の異質性の否定へと向かっている。そこにはとても堅い壁があり、たやすく説得できるわけではない。しかし『おしゃべりをするように』話し続けていくなかで、ふと力が抜ける瞬間がある。関係性を固定して捉えると希望はない。狭間を捉えて伝えることが必要だ」²⁶⁾。

近代社会科学の前提としての実体主義的な主体論 方法論的全体主義と方法論的個人主義

の閉塞によって、他者の異質性の問題は解けなくなってしまう。個人であれ集団であれ、主体とは他者との関係性のなかで創発するものだという前提と、他者の異質性への認識とを両立することはいかにして可能なのか。その有力な道筋は、双方の「實在」の捉え方 (実体主義) を問題とし、實在を関係性の束として再定義しようとしたゲオルグ・ジンメル の立ち位置から始めることであろう²⁷⁾。ただし抽象化された「関係性」を実体化することにもまた、注意が必要である。関係性もまた、「非線形的で常に生成 (becoming) 途上にある」社会過程だからだ。「未発の状態」のエピステモロジーが想定する主体像は、個人であれ集団であれ、単一の「確固

たる自己」を持つ実体としては「閉じて」おらず、「(閉じた実体として見れば)異質な」他者との“間”で二者(ないし三者)関係が立ち上がる蓋然性が高まった状態である。

新原がメルッチとの対話のなかで錬成した“未発の社会運動”概念は、社会運動の「潜在性」のなかでとり結ばれる「関係性の動態」を感知することを主眼としていた。しかしこうした関係性の動態は、いかにして捉えられるのだろうか。第1節で検討した“未発の状態”の認識方法と同様、経験的調査において可能なのは、すでに生起した「集合的な出来事」を認識媒体として、その時点から社会過程をふりかえることで“未発の状態”としての関係性の動態を後づけるほかないだろう。

こうした試みの先例として、日本の歴史学における民衆史研究の蓄積が参照点となる。色川大吉は『新編明治精神史』のなかで、自由民権運動期に生まれた思想の水面下にあった民衆の精神の水脈を把握しようと試み、その問題設定を次のように述べた。

歴史に埋もれた人民の思想の地下水をさぐろう。そこに未来を拓く変革の契機 『未発の契機』をさぐろう。その歴史の底の水脈に自分の視座を据えないかぎり、真の思想の自由はありえない。内発的な道も求めえない。その底辺の視座から全歴史をとらえ直す方法をあみださなくてはならぬ²⁸⁾。

色川は、多摩地域をフィールドとして文書資料を渉猟し、「在地型活動家」と「放浪型活動家」として類型化される特定の個人と個人との出会いと相互行為、繰り返し行われた「読書会」「集会」の連なりを、個別具体的に記述していった²⁹⁾。こうして多摩地域における「自由民権運動」を「整合的な実体」としてではなく、いくつもの「集合的な出来事」の連なりとして再構成したのである。

“未発の状態”のエピステモロジーにおいて、「関係性の動態」は蓋然性の時空間のなかに位置づけられるが、過去をふりかえるとき、生起した「集合的な出来事」の連なりの「水面下」にある「関係性の動態」は、収束した一連の現実態として把握される。これは調査者にとっては客体であるが、当事者にとっては選りとられた一筋の道程であり、その認識行為にこそ主体性がある³⁰⁾。こうして把握された特殊的・歴史的な“「関係性の動態」の束”が、色川の言うところの“水脈”である。“未発の状態”の主体像は、実際の経験的調査においては「出来事」の背後にある“水脈”として把握されることになるだろう。

4. おわりに 『惑星社会のフィールドワーク』へ向けて

歴史研究というものは自分の外に起こってきた出来事を観察し、分析し、叙述するものだと考えている人がいるようである。そのような考え方もありうるであろう。しかし私たちは歴

史研究をそのようなものとは考えていないのである。私たちにとって社会史研究とは自分の奥底に深くわけ入ってゆく試みであり、ただ外を見ることではない。外的事象と対応するものを自分の中に発見できないでどうして外的事象を理解することができるだろうか³¹⁾。

本稿では、研究チーム「3.11以降の『惑星社会』」が2016年度に刊行を予定している『惑星社会のフィールドワーク』に向けて、“未発の状態”をキーコンセプトとするエピステモロジーと、それが想定する主体像を検討してきた。これらの見解に関しては、研究チームでさらなる議論を必要とするだろう。本節では本稿の結びとして、“未発の状態”のエピステモロジーに基づきいかなる経験的調査が可能なのかという、メソドロロジー/メソツズをめぐる問題について、現段階での「覚え書き」をまとめておきたい。

その1.“未発の状態”だけを捉えるための調査研究、という組み立てはありえない。いつでも限定されたりサーチクエスションはあり、それ以外の意味に「後から気づく」という設計になる。可能な戦略としては、「後から気づく」という“未発の状態”のエピステモロジーの実践の「余地」を残しておくということである。すなわち、ひとつの調査研究に複数の意味を持たせる戦略としてのメソドロロジー/メソツズということになる。

その2。いつ、誰が“未発の状態”を捉える（「居合わせた」ことに後から気づく）かは先験的には分からない。限定されたりサーチクエスションには答えが出るが、「人事を尽くせば報われる」という組み立てにはなっていない。自分が出会い、記録した出来事の意味に「後から気づく」のは、自分ではないかもしれない。自身の「有限性」の自覚と「断念」が、“未発の状態”のエピステモロジーの実践に向けた必要条件であり、これは相互性・集合性のなかでこそ可能となる。

その3。“水脈”としての主体を捉えるための概念と方法を集合的に錬成する。そのための“場”づくりそれ自体を、研究プロジェクトに埋め込むこと。その方法論的な戦略は次のように分節化できる³²⁾。対象を分析するカテゴリーを練り上げるための“場”づくりを、集合的に行う《practice》。自らの“場”づくりという集合的な実践と、対象についての知見との比較を通じて、分析概念を練り上げる《creation》。すなわち、対象を分析する概念によって、自分たちの「集合的な試み」をも分析することになる。両者の関係性の動態を比較分析する《reflection》。

“未発の状態”を捉えるためのメソドロロジー/メソツズの錬成は、今後の課題として残されている。これは『惑星社会のフィールドワーク』執筆に向けて、それぞれのフィールドワークの

実践と知見を持ち寄るといふ「集合的な試み」のなかでなされるだろう。そのためには、自身のエピステモロジー／メソドロロジー／メソツズの組成への自覚が求められる。本稿はその試みの一歩であった³³⁾。

注

- 1) 新原道信編著『“境界領域”のフィールドワーク “惑星社会の諸問題”に応答するために』中央大学出版部，2014年。
- 2) 1995年1月17日，阪神・淡路大震災もまた，そのような契機であったはずだ。
「常識」と考えられていたものが，突然の断絶にさらされたとき，われわれはそこに「隠されていたもの」をみいだすことがある。阪神・淡路大震災もそうした出来事であった。(……)では，その現れた「隠されていたもの」とは何か。ここでわれわれが用いている「隠されていたもの」という比喩は，「もの」の本質といったことではない。それは普段「常識」という衣のなかにくるまれていて自覚されていないもの，しかし「常識」のなかで重要な働きをしているものという意味である。「常識」の断絶はそれを顕にする。(古城利明「地域社会学の構成と展開」地域社会学会編『キーワード地域社会学』ハーベスト社，2000年，1ページ。)
- 3) 新原道信「“境界領域”のフィールドワークから“惑星社会の諸問題を考える”」，前掲書，39ページ。
- 4) 同上。
- 5) 同上。
- 6) 新原道信「自らを見直す市民の運動」矢澤修次郎編『社会運動 講座社会学15』東京大学出版会，2003年；新原道信「現在を生きる知識人と未発の社会運動 県営団地の『総代』『世間師』そして“移動民”をめぐる」新原道信・奥山真知・伊藤守編『地球情報社会と社会運動 同時代のリフレクシヴ・ソシオロジー』ハーベスト社，2006年。
- 7) 新原道信「生存の場としての地域社会の探究／探求 (Exploring Communities for Sustainable Ways of Being)」『地域社会学会会報』No.188，2015年1月15日；古城利明「3.11以後のリージョンとローカル 東アジア・日本を中心に」『地域社会学会会報』No.187，2014年11月4日；鈴木鉄忠「第2回地域社会学会研究例会印象記」『地域社会学会会報』No.187；阪口毅「地域研究の『往路』をふりかえる (第3回地域社会学会研究例会印象記)」『地域社会学会会報』No.188。
- 8) これらの要素の有機的な結びつきを欠く場合，ミルズが批判したように，概念なき実践は「抽象化された経験主義」に，実践なき概念は「誇大理論」へと陥ることになる。(C. W.ミルズ，鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊國屋書店，1995年。)
- 9) 友澤悠季『『問い』としての公害 環境社会学者・飯島伸子の思索』勤草書房，2014年，84ページより示唆を得ている。書かれたもの，中範囲の理論として(読まれる)の「被害構造論」から，飯島伸子さんのエピステモロジー(メタ理論)を描き出す試みとして受けとめた。
- 10) 阪口毅，前掲書，8ページ。
- 11) 同上。
- 12) 鹿野政直『『鳥島』は入っているか 歴史意識の現在と歴史学』岩波書店，1988年，129ページ。
- 13) 古城，前掲書。
- 14) アルベルト・メルッチ，山之内靖訳『現在に生きる遊牧民 新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店，1997年，45ページ。
- 15) 同上書，15ページ。
- 16) 同上書，78ページ。

- 17) 吉原直樹「コミュニティ・スタディーズ 災害と復興，無縁化，ポスト成長の中で，新たな共生社会を展望する」作品社，2011年，32ページ．
- 18) 浅野慎一「国土のランドデザインと『生活圏としての地域社会』」『地域社会学会会報』No.187，2014年11月4日，4ページ．
- 19) 同上．
- 20) 同上．
- 21) 似田貝香門編著『自立支援の実践知 阪神・淡路大震災と共同・市民社会』東信堂，2008年．
- 22) 中澤秀雄「地方自治体『構造分析』の系譜と課題 『構造』のすき間から多様化する地域」蓮見音彦編『村落と地域 講座社会学3』東京大学出版会，2007年，188ページ．
- 23) アルベルト・メルッチ，新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『ブレイング・セルフ 惑星社会における人間と意味』ハーベスト社，65ページ．
- 24) アルベルト・メルッチ 新原道信訳「聴くことの社会学」地域社会学会編『市民と地域 自己決定・協働，その主体 地域社会学会年報13』ハーベスト社，2001年，6ページ．
- 25) 2014年12月8日の筆者日誌より．
- 26) 同上．
- 27) ゲオルグ・ジンメル，石川晃弘訳『社会的分化論』中央公論新社，2011年．
- 28) 色川大吉『新編明治精神史 色川大吉著作集第1巻』筑摩書房，1995年，547ページ．
- 29) 本稿では触れられないが，こうした「在地型」と「放浪型」との「出会い」は，鶴見和子の社会運動論とも重なる．鶴見は，柳田国男の「生涯漂泊ノ一時漂泊ノ定住」概念と桜井徳太郎の「ハレノケノケガレ」をめぐる議論とを接合し，次のように述べる．ここに描かれる主体像もまた，関係性の動態のなかで揺れ動き「形を変える」自己を特徴としている点に着目すべきであろう．
- ある特定の地域共同体内に定住する人々はその間に永年定住することによって，視野狭窄となり，惰性に流されやすい．精神的活力の枯渇をきたし易い（ケガレ）．その時に，元気をとりもどす方法は，二つある．一つは，旅に出ることである．もう一つは，外から来る漂泊者を迎えて，あたらしい知識や信仰を学ぶことである．そうすることによって，共同体の外の世界と，自己の生活とを比較する視野がひらける．比較によって，自分の状況について，より明らかな自覚に到達することができる．定住者にとって，一時漂泊および，漂泊者とのあいには，自己覚醒の作用をもたらすものである．とくに，マツリ（ハレ）の場におけるあいには，定住者に強い衝迫を与える．そのことが，定住者をゆり動かして，社会的な活動ないし運動へかりたてる原動力となることは，可能である．（鶴見和子『漂泊と定住と 柳田国男の社会変動論』ちくま学芸文庫，255ページ．）
- 30) 選ばとられた“「関係性の動態」の束”としての“水脈”は，新原の概念では“流動する根”として表わされるだろう．それは「固定された実体として表象され」るのではなく「あくまで『メタモルフォーゼ』を前提として 動きのなかでふりかえったときに見いだされる“根の重合性・流動性（*compositezza/fluidità delle radici umane*）」として把握される．（新原道信「訳者あとがき 「瓦礫」から“流動する根”」アルベルト・メルッチ著，前掲書，2008年，245ページ．）cf．新原道信『ホモ・モーベンス 旅する社会学』窓社，1997年．
- 31) 良知力『向こう岸からの世界史』ちくま学芸文庫，1993年，阿部勤也先生の解説より．
- 32) 中央大学における「集合的な試み」として，2011年度より東京都立川市の都営住宅をフィールドとして，学生有志による「立川プロジェクト」を継続している．
- 33) 筆者自身のメソドロジー/メソゾスに関しては，以下を参照のこと．（阪口毅『都市コミュニティ』研究における活動アプローチ 大都市インナーエリア・新宿大久保地域における調査実践より』『リスケーリング論とその日本の文脈 地域社会学会年報』25，ハーベスト社，2013年，77-91ページ．）